

美濃焼、世界へ

徳川幕府（1603-1867）のもとで 2 世紀以上にわたって鎖国を続けてきた日本は、1868 年の明治維新を機に、急速な工業化と西洋化の時代を迎えた。明治政府は、日本製品の普及と海外技術の研究を目的とし、国際的な博覧会に参加するようになった。その始まりが 1873 年のウィーン万国博覧会だった。中でも陶磁器は重要な輸出品として位置づけられ、日本の美意識やイメージを賛美するジャポニスム芸術がヨーロッパで受け入れられたことで、大きな需要が生まれた。1888 年には、日本の陶磁器の輸出量は約 3 倍になった。5 年後のシカゴ万国博覧会では、出品された 290 点の美術品のうち 271 点が日本製で、その中には多数の陶磁器も含まれていた。

これらの国際展では、美濃の美術品が多く取り上げられた。美濃の芸術家の中には、磁器メーカーの加藤五輔（1837-1915）や五代西浦圓治（1856-1914）のように、西洋の形式を取り入れて海外市場にアピールする人もいた。ここに展示されている茶道具はその一例である。圓治の息子は、父の技法である釉薬を大量生産する方法を見つけ出し、名古屋に工場を設立して海外にも販売することで、西浦ブランドを確立した。その数年後には、陶磁器の実業家である加藤助三郎（1856-1908）が中国、インド、アメリカ、南アフリカなどに美濃焼の販路を開拓し、日本初の陶磁器業界紙を創刊した。